SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

「お茶ある限り希望あり」？

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学人文社会科学部アジア研究センター 公開日: 2024-04-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鈴木, 実佳 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/0002000575

「お茶ある限り希望あり」？

鈴木実佳

はじめに

お茶と健康は強い結びつきをもっている。研究者たちは茶の成分を分析し、どの要素が心身の健康にどんな作用があるか、どのような病気、症状に茶のどの成分がどんな働きを持ちうるかを詳細に研究し、日々知見が深まり、そして広まっている[1)]。本稿では茶と長寿への関心を文学などの文献から探る。

その準備としてネット上での茶の扱われ方の状況をみておこう。関心の度合いを知る一つの方法は検索でヒットする件数である。そこにどのくらいのアクセスがあるのかということも確認できれば良いが、発信サイトの数は一般向けに情報を発信する動機と期待をもつ人々の数をある程度反映し、関心の程度を知るための参考になるだろう。茶関連のその数は莫大であるので、何が頼りになるのかわからずインターネットの世界で彷徨って途方に暮れることになる。総合的で信頼できるサイトはどこにあるのか誰か教えて！と多くの人が思っているだろう。英語での検索を地球規模の関心を示すものとし、日本語での検索を日本での関心を示すものとしよう。2023年初め、Yahooにおいて‘tea good for health’は10億以上（Googleでは12億）、「茶　健康」は2億以上が検索される。そして‘tea good for longevity’では、1930万、「茶　長寿」は730万程度である。簡単に他と比べておけば、‘wine good for health’は8億以上、‘exercises good for health’は4億程度である。主に学問の世界を対象とするgoogle scholarでは、‘tea good for health’は166万、‘wine good for health’は106

この論文は、2022年10月21日開催の第27回静岡健康・長寿学術フォーラム「お茶と一服、健康と安全から長寿を考える」での口頭発表――「お茶ある限り希望あり」：‘... while there is tea, there is hope.’ Pinero――をもとにしています。

1) 茶の各成分が身体にどのような影響をもたらすかについては、数多くの研究結果が学会誌掲載の論文や一般向けの書物として出版されている。『新版茶の機能　ヒト試験から分かった新たな役割』日本茶業中央会、衛藤英男他編（東京：農文協, 2013）から約10年が経ち、新しいところでは、伊藤園中央研究所の所長を務めた角田隆巳の『お茶で手に入れる最高の健康』（東京：ポプラ社, 2022）などがある。ただし、科学的研究の細分化とお茶の総合性には方向性の齟齬がある。茶に関する情報は適切な総合化を必要としているといえる。Zhangが指摘するように、古くは茶は人の特定の体質や特定の状況を想定して、薬効があると言われてきており、現代の科学的証拠においても、専門化、細分化されて、特定のある成分についての証拠が提示される。ところが、この個別性はマーケティングの都合に合致しない。その結果、消費者の立場からみるとまるで決定的な情報を欠いているような印象を与えている。Lawrence Zhang, “Becoming Healthy: Changing Perception of Tea’s Effects on the Body,” in *Moral Foods : The Construction of Nutrition and Health in Modern Asia,* ed. Angela Ki Che Leung and Melissa L. Caldwell (Honolulu: University of Hawaii Press), 201-220.

万、‘exercises good for health’は121万が検索でヒットする。Google scholar（これを仮に学問の世界としよう）では茶、運動、ワインの順で、一般では茶、ワイン、運動の順でより「健康」と結びつきやすくなっている。そして学問の世界での関心と一般の関心は3桁違っていて、茶と健康がいかにとびぬけて一般人の関心を引き寄せているかが実感できる。茶と長寿については、茶と健康に比べて世界的には60分の一、日本では30分の一の関心が注がれ、割合で言うと日本での茶と長寿への関心が高いということになる。

茶と名言

人々がこのように一般的に関心を寄せている茶であるので、茶に関する言説は随所にみられる。あるいは随所にみられるからこそ人々はそれを認識し、そして関心をもつようになっている。茶にまつわる「名言」もインターネット上にはあふれている。たとえば、以下のような列挙をみかけるだろう[2)]。

- Tea time is a chance to slow down, pull back and appreciate our surroundings. - Letitia Baldrige
- As much as you can eat healthily, it’s also important to remember to drink healthy too. Tea is very healing. - Kristin Chenoweth
- Come, let us have some tea and continue to talk about happy things. - Chaim Potok
- It was part of Kipling’s ‘Natural Theology’ that to lack tea for a week knocked the bottom out of the Universe... - *Daily Telegraph*, 1938.
- Tea is like the East he grows in, / A great yellow Mandarin / With urbanity of manner / And unconsciousness of sin; All the women, like a harem, / At his pig-tail troop along; / And, like all the East he grows in, / He is Poison when he’s strong. / Tea, although an Oriental / Is a gentleman at least; Cocoa is a cad and coward / Cocoa is a vulgar beast. / Cocoa is a dull, disloyal, / Lying, crawling cad and clown, ... - G.K. Chesterton, *The Song of Right and Wrong*, 1914.
- Love and Scandal are the best sweeteners of tea. - Henry Fielding, *Love in Several Masques*, IV, xi.

---

2) Tea Quotes（茶を題材にした名言、引用を集めたもの）には、誰の言葉であるかは示されているが、出典が欠如している場合が多い。以下には出典もできる限り補った。

- I am a hardened and shameless tea drinker, who has, for twenty years, diluted his meals with only the infusion of this fascinating plant; whose kettle has scarcely time to cool; who with tea amuses the evening, with tea solaces the midnight, and, with tea, welcomes the morning. - Samuel Johnson, *Literary Magazine*
- But indeed I would rather have nothing but tea. - Jane Austen, *Mansfield Park*, chap XIX
- If you are cold, tea will warm you; if you are too heated, it will cool you; If you are depressed, it will cheer you; If you are excited, it will calm you. - William Ewart Gladstone
- The spirit of the tea beverage is one of peace, comfort, and refinement. - Arthur Gray, *The Little Tea Book*
- ... while there is tea, there is hope. - A.W. Pinero, *Sweet Lavender*
- Under certain circumstances there are few hours in life more agreeable than the hour dedicated to the ceremony known as afternoon tea. - Henry James, *The Portrait of a Lady*
- Tea is one of the main stays of civilization in this country. - George Orwell, *Smothered Under Journalism*, 1946.
- Normality returned. Tea! Bless ordinary everyday afternoon tea! - Agatha Christie, *And Then There Were None*
- Tea is the elixir of life. - Eisai, *Kissa Yojoki*
- I am in no way interested in immortality, but only in the taste of tea. - Lu T'ung
- Tea ... is a religion of the art of life. - Kakuzo Okakura, *The Book of Tea*

ひとつひとつ面白いので、短評をいれておこう。最初の3つはいずれもアメリカ人によるものである。「お茶の時間は、ゆったりして、立ち止まり、周りをみまわして良かったなと思う時間です。」と言っているのは、ボルドリッジ（Letitia “Tish” Baldrige, 1926-2012）で、この人物はエチケットやマナーの達人として有名であり、ジャクリーン・ケネディ（Jacqueline Kennedy Onassis, née Jacqueline Lee Bouvier, 1929-1994）の渉外担当であった。お作法の大御所が、お茶の時間は緊張を解いてゆったりし、自分の周囲に良きものがあってくれることに気づく余裕をもっていいんだよと言ってくれるのは何とも心強いことだ。チェノウェス（Kristin Dawn Chenoweth, 1968-）は、「健康的な食事をするのと同じように、健康的なものを飲む

のは大事です。茶は癒やしです。」と言っている。彼女は女優であり歌手でもあって、ミュージカル、映画、テレビドラマで活躍した。ポトク（Chaim Potok, 1929-2002）は、作家でありユダヤ教の指導者でもあった。彼が言うには、「さあ、お茶を飲んで、幸せなことをさらに話しましょう。」である。

イギリスの新聞に登場してもらおう。「お茶が一週間ないということは、宇宙を根底から覆すほどのことであるとキプリングは『自然神学』で言っている。」（『デイリーテレグラフ』1938年）キプリング（George Kipling, 1865-1936）はインドのボンベイで生まれた作家で、作家活動により1907年にはノーベル賞を受賞した。ほぼ同時代のチェスタートン（G.K. Chesterton, 1874-1936）は、著述家として幅広く活躍し、近年ドラマ化されて長く好評を得ている「ブラウン神父」の産みの親である。「パラドックスの王」（mere paradox; the prince of paradox, the king of paradox）と言われた彼の詩に描かれる茶は、ちょっと複雑だ。ここには茶、ワイン、水、ココアといった飲み物が登場する。「茶は、それが育つ東洋の人々のようで、都会的なふるまいをして、罪の意識をもたない偉大なる黄色の清朝官吏／ミカンのようである。その辮髪にハーレムのように女たちが皆で群れをなす。生まれ育つ東洋のものがそうであるように、茶は強いときは毒である。茶は、東洋のものであるが、少なくとも紳士である。ココアは女性に対して非礼で臆病者である。ココアは卑しい獣である。ココアは退屈で不実で嘘つきでこそこそと地を這う礼儀知らずの道化だ。」ココアに対する見解は「臆病で」、「礼を欠き」、「愚鈍で」、「不実で」、低きを這いずり回る「卑しい獣」として単純であるが、茶については、憧れと恐れと尊敬と差別的感情が混淆する。薬としての効能をもつ茶が濃くいれれば毒になる／強大になり得る、あるいは、東洋は自分たちにとって毒となり得る。また、東洋で育つものと尊敬すべき紳士の間の逆接（although）が気になるところで、恩着せがましくもある。それでも、東洋に対する相反する見解を併せ持ちながら、その根本は「紳士」的なものとして好意的に評価される。

遡って18世紀のフィールディング（Henry Fielding, 1707-1754）とジョンソン（Samuel Johnson, 1709-1784）を参照しよう。フィールディングの芝居第一作である『仮面の恋』（*Love in Several Masques*, 初演1728）に彼は親戚であり教養人として名高いレイディ・メアリ・ワートレー・モンタギュ（Lady Mary Wortley Montagu, 1689-1762）への献辞を添えている。恋愛と求婚の場での人々の言動や社会の在り方に諷刺の目を向け、仮面、偽装と真実や、社会の中での男女の役割に注意が注がれる。「恋愛とスキャンダルがあるとお茶は最も甘く美味しくなるものですわね。」は、主人公が恋する相手であるレイディ・マッチレスの台詞である。これに対して会話の相手は「最も苦くするものだとおっしゃりたいのですよね。」（The best Embitterers, you mean;...）と返答する。女性たちの茶の席でこんな会話が交わされ

る一方で、主人公は厭世的で本の世界に逃げ込もうとする一面をもち、「賢人、学識者、善人〔との親交をもっています〕。本がたいてい私の友であり、この時代の社会よりも本と共にあるのが好もしいのです。キケロ、エピクテトス、プラトン、アリストテレスを楽しめるときに愚者や洒落者と話したい人がいましょうか？コーヒーハウスや茶の席で、醜聞、嘘、舞踏会、オペラ、策謀、ファッション、おべっか、ナンセンス、それにこの世のありふれたおしゃべりから成るくだらないうじゃうじゃで、自分の午後を無駄に過ごしたい人がいましょうか？」と述べる[3)]。彼にとって、『スペクテイター』（*The Spectator,* 1711-1712）が男性市民の会話と哲学の場としたコーヒーハウスも、家庭のティー・テーブルも、忌まわしくくだらない情報が飛び交うだけの場になっている。

ジョンソンが言っているのは、茶愛好家の愛すべき日常である。「私は融通のきかない恥知らずで茶ばかり飲む者である。20年にわたり、この魅力的な植物の抽出液で食事を薄め、私のやかんは冷めている暇がないくらい常に湯をわかしている。私は夕べの時を茶で楽しみ、夜中に茶でなぐさめを得て、朝を茶で歓迎する。」ジョンソンはこれを茶の普及に反対する論者への反論の切り札にした。ロシアとの貿易で財を成し、慈善家としても有名なハンウェイ（Jonas Hanway, bap. 1712, d. 1786）の茶論（*An Essay on Tea*）は、1756年出版の旅行記に添えられている[4)]。この茶論は、茶の普及反対の立場を明確にとり、茶を求めることから生ずる輸入超過の数字を挙げて愛国心に訴えながら貿易収支問題に注目を誘い、東インド会社の経営方針に疑問を投げかける。実際、以後顕在化することになる国家的問題が指摘されている。しかし、警戒心を広く呼び起こすことに失敗した。ハンウェイが女性への手紙の形式を借りて国家や道徳を語ろうとするのに対し、ジョンソンはまともに反論せずに自分の抑えきれない嗜好と茶にどっぷりつかった自分の日常の状況を白状して、自虐を対抗手段とした。この自虐でかえって正々堂々と自分の茶擁護の立場を明確

---

3) '...'Tis no Secret that you have had the Conversation of—'
Wisemore: 'The Wise, the Learned, the Virtuous. Books, Sir, have been mostly my Companions, a Society preferable to that of this Age. Who wou'd converse with Fools and Fops, whilst they might enjoy a Cicero, or an Epictetus, a Plato or an Aristotle? Who wou'd waste his Afternoons in a Coffee-House, or at a Tea-Table, to be entertained with Scandal, Lies, Balls, Operas, Intrigues, Fashions, Flattery, Nonsense, and that Swarm of Impertinences which compose the common-place Chat of the World?' Henry Fielding, Love in Several Masques. A Comedy, Etc, ([1728]), https://www.amazon.co.jp/Love-Several-Masques-universal-English-ebook/dp/B07MF218V3/ref=tmm_kin_swatch_0?_encoding=UTF8&qid=&sr=. *Love in Several Masques,* Act I, Scene II.

4) Jonas Hanway, *A Journal of Eight Days Journey from Portsmouth to Kingston Upon Thames ... In a Series of Sixty-Four Letters: Addressed to Two Ladies of the Partie. To Which Is Added, an Essay on Tea: Considered as Penicious to Health: Obstructing Industry and Impoverishing the Nation...With Several Political Reflections on Thoughts on Public Love in Twenty-Five Letters to the Same Ladies* (London: printed by H. Woodfall, 1756).

にするポーズをとり、論敵が愛国者として提示した憂いをまさに茶化してしまった[5]。茶は、やかんが冷める暇のないくらい淹れられて、学者の読書の友となり、人々との語らいの場をとりもつ大切な嗜好品となっていたのである。

オースティン（Jane Austen, 1775-1817）からの引用は、彼女の小説のひとつ『マンスフィールド・パーク』（*Mansfield Park*, 1814）からである。この小説は、品行方正な女性主人公をもち、最もつまらない作品と評されることもあったが、最も深い問題を含んだ作品だとも評される。一つの問題がイギリスの植民地との関係である[6]。主人公が養育される家庭の富は部分的に西インド諸島のアンティグアからもたらされている[7]。アンティグアの所領での砂糖生産によりこの家の豊かな生活が支えられている。砂糖は、もちろん彼らにとって茶を飲むときの必需品である。もっとも、バートラム家にとって事業経営が必ずしもうまくいっていないことが判明する。実際に1807年にはイギリス植民地で奴隷貿易が禁止となり、砂糖プランテーションの状況は大きく変化していたので、これはバートラム家だけに限った苦境ではなかった[8]。フィクションの中では、所領の主がイングランドから足を運ぶ必要が生ずるので、主人公の叔父であるサー・トマス・バートラムが現地に旅をしなくてはならず、そのため主が館を留守にするという状況が描かれることになる。そしてアンティグアから帰国したときに、彼は「決意をもって正餐にするのはやめておくと言った。お茶が来るまでは何も欲しくないのだった。―　お茶の時間まで待とうというのだ。」[9] 彼にお茶ではなく、正餐やスープを勧めているのは、彼の留守中に起こっていた若者たちの野放図な状況や不手際について雷が落ちるのではないかと冷や冷やし、何か自分の仕事が生ずるように（食事の手配を言いつかるように）画策したいノリス夫人である。彼女の意図を知ってか知らずか、サー・トマスはお茶にして会話の場をもちたい。家族の皆に自分が体験してきたことを話したいのだ。

---

5) *Literary Magazine* 2, no. 13 (1757).

6) 例えば次を参照。 Moira Ferguson, “Mansfield Park: Slavery, Colonialism, and Gender,” *Oxford Literary Review* 13 (1991); Edward W. Said, *Culture and Imperialism* (London: Vintage Digital, 2014); Deirdre Coleman, “Imagining Sameness and Difference: Domestic and Colonial Sisters in *Mansfield Park*,” in *A Companion to Jane Austen*, ed. Claudia L. Johnson and Clara Tuite (Chichester: Wiley-Blackwell, 2012).

7) Frank Gibbon, “The Antiguan Connection: Some New Light on “Mansfield Park”,” *The Cambridge Quarterly* 11, no. 2 (1982)

8) Eric Eustace Williams, *Capitalism and Slavery* (Chapel Hill, N.C.: University of North Carolina Press, 1944), pp. 145-152; Robin Blackburn, *The American Crucible : Slavery, Emancipation and Human Rights* (London: Verso, 2013), pp. 304-305; Stephen Mullen and Research University of London. Institute of Historical, *The Glasgow Sugar Aristocracy : Scotland and Caribbean Slavery, 1775-1838*, New Historical Perspectives (London: Institute of Historical Research, 2022), passim.

9) ... but Sir Thomas resolutely declined all dinner; he would take nothing, nothing till tea came - he would rather wait for tea. Jane Austen, *Mansfield Park*, with an introduction by Kathryn Sutherland ed. (London: Penguin, 2014), p. 168.

彼はいつになく饒舌で、暖炉の前で輪になった家族の関心の中心になって上機嫌で語る。この幸福な旅の報告の語りを続けたいということを彼は皆でお茶を飲むことを命令、提案することで代弁させる。お茶は会話の輪を保つための設えである。

4度にわたり計12年首相を務めたグラッドストン（William Ewart Gladstone, 1809-1898）は、その雄弁でも知られ、「寒かったらお茶が温めてくれる。暑かったら冷ましてくれる。気持ちが沈んだら元気づけてくれる。興奮してしまったら落ち着かせてくれる。」とどんな状況であっても人がその場で必要とする効能を与えてくれる茶の芸達者な特質を指摘する。

グレイ（Arthur Gray, 1852-1940）は、著述家として活躍し、ケンブリッジ大学ジーザス・コレッジの学寮長を務めた人物である。彼の著作物の題材は主にシェイクスピアとケンブリッジの歴史で、（'Ingulphus' の筆名を使った）怪奇談の創作も行った[10]。彼の『小さな茶の本』（*The Little Tea Book,* c1903）では、中国、日本、イギリスの茶の歴史を語り、茶を題材にした詩を紹介していく。フッド（George W. Hood, 1869-1949）の味のある挿し絵には女性が度々登場し、暖炉や猫といった安らぎと安心を与えるものが描かれている。たとえば、掛け軸のかかった部屋で和服の日本人女性が茶を飲もうとしている図があり、二人で向かい合って茶を楽しむ女性二人、また一人で茶を飲もうとしている老婦人の傍らには猫がちょこんと座っている[11]。冒頭部分で述べているのが「お茶の精神・真髄は、平和、安心、洗練だ。」である[12]。それに続く部分も興味深く、また彼の日本での茶に関する興味の視点のとりかたも特筆に値するのでここでとりあげておこう。「こうした資質はすべて女性的なものと関連づけられるので、真の世界の統治者である彼女たちのおかげで茶は特権を得て流行しているのである。」[13] イギリスの茶が18世紀以来、理由は明確ではないが女性的なものとなってきていることをグレイは総括している。そして茶を題材にした詩作を挙げながら、茶が文人たちにいかに豊かな着想をもたらし、文化に面白い作用をしてきたかをたどる。彼の発想のなかでありそうでなかった着眼点の一つがシェイクスピアを持ち出したことである。シェイクスピアはイギリスがまだ茶を知らない時代を生きた（1564-1616）。両者の出会いがなかったことを彼は嘆く。茶を囲む席の喜劇性と茶のように「香気に富み、きれいで汚れなきもの」があっ

---

10) Rosemary Pardoe, "Arthur Gray," http://www.users.globalnet.co.uk/~pardos/ArchiveGray.html.

11) Arthur Gray, *The Little Tea Book* (New York: The Baker & Taylor company, 1903), pp. 30, 45, 79. 掛け軸と日本人女性の図では女性の前には急須があり、女性は湯飲みではなく、右手にカップのようなもの、左手にソーサーのようなものを持っている。

12) Ibid., iii.

13) A glance through this book will show that the spirit of the tea beverage is one of peace, comfort, and refinement. As these qualities are all associated with the ways of women, it is to them, therefore - the real rulers of the world - that tea owes its prestige and vogue. (ibid., vii-viii)

たら、シェイクスピアの作品はどれほどその素晴らしさを増したか、シェイクスピアのような優れた作家を得たら、茶をめぐって描かれる世界がどんなに複雑な重層性をもって豊潤なものになったか、彼は夢想する[14]。

この100ページほどの「小さな」本で日本の茶に関する記述は比較的豊かである。茶の用意のしかたと飲み方が説明される節で、彼の関心は集いと語らいに向けられる。まずすべてを揃えた茶セット（*Ju-bako*）は「ピクニック・ボックス」である。このセットを使う機会として特に花見をとりあげる。一般の日本人に尋ねたら茶と花見はおそらく直結しないだろう。グレイによると茶のセットである重箱を花見にもっていくのは悦びである。「美しい景色と天が恵んだ雰囲気をもつ土地」は「この素晴らしい国民の詩的で芸術的な性質」に調和しているからである。茶屋と茶会の説明がそれに続く。エリートたちの茶の湯にも言及するが、面白いのは「茶話」（*Châ-banashi*）「一口話」（*Hiti-Kuchá.*）への言及、そして語りのプロたちを登場させることである。噺家（*Hanashi-Ka*）、辻講釈師（*Tsuji-kô-shâku-ji*）までそれぞれどんな専門家であるのか説明を伴って言及される[15]。グレイにとって茶の席は徹底して人々が集って楽しむ会話と物語の場なのである。

ピネロ（Arthur Wing Pinero, 1855-1934）の戯曲『麗しきラベンダー』（*Sweet Lavender,* 1888年初演）での茶に関する価値観もグレイに似ている。1888年の時点でラベンダーは流行りの植物であり、ここでは、家政婦（辛い労働をしている洗濯女）の娘である女性の名前である。銀行家の養子として育った青年と彼女の恋と、その青年の幼馴染で活発な女性（アメリカ人からみれば古風なのであるが）とアメリカ人男性の恋の二つの恋愛物語が並行して進む。この芝居は19世紀前末から20世紀初めにかけてかなりの人気を博した[16]。この芝居からとった台詞が茶の引用集に出る際には「イギリス社会においては」の部分が省略されて「お茶ある限り希望あり」だけがとりあげられているが、これはイギリス社会の在り方についてよそ者としてのアメリカ人が観察したものである[17]。アメリカ人である男性からみて、心を寄せる女性を前にして互いに相手の気持ちをはかりかねてぎこちない時が流れてしまったとき、イギリスではその場、その空気を救ってくれるのは、茶であり、茶を勧められたら、そこにはまだ希望があるということだと解釈して彼女との会話を続けることができるという場面だ。茶は互いに対話の関係を維持する道具立てである。また、お茶はそこかしこで登場し、この芝居のなかで他にも役割を負っている。

---

14) Ibid., pp. 36-38.

15) Arthur Wing Pinero, *Sweet Lavender : A Domestic Drama* (London: William Heinemann, 1914), pp. 53-58.

16) 1888年から1890年1月にかけて684公演が行われ、その後すぐに復活して737公演があり、1899年、1922年、1932年にも再演され、ブロードウエイでも1905年、1923年に上演された。

17) Pinero, *Sweet Lavender : A Domestic Drama.*, p. 73.

ティーカップを渡すために互いの距離を縮める必要があり、お茶のおかげで相手の近くに行くことができたり、相手の様子を観察したいときにはティーカップ越しに視線を送ることもできる[18]。読んでもらえることを確かにしたいときティーカップの上に手紙が置かれ、上の空の人物はポットの注ぎ口から茶が流れ出るままにし、ティースプーンを磨く動作は場面に何気ない日常の安心感を添える[19]。

ヘンリー・ジェムズ（Henry James, 1843-1916）の文章で選ばれているのは、『ある婦人の肖像』(1881）からである。人物の緻密な心理描写に優れたこの作家の初期の代表作であるこの小説は、美しいイギリスのカントリーハウスでのお茶の場面から始まる。「ある状況の下では、午後のお茶という名で知られている儀式の時間ほど楽しいものは、人生においてあまり見当たらない。」は、その最初の一文である[20]。ここに集っているのは、「普通お茶を愛好する人種、つまり女性」ではない。30年前にアメリカからイギリスに渡ってきた銀行家がその金銭上の成功により古い屋敷を手に入れ、そこの芝生で二人の青年と共に「みなぎり溢れていた夏の光はもうおだやかになりはじめ」、「まろやかに」なった大気に包まれた美しい夏のイギリスの長くゆったりとした午後、茶を楽しんで過ごしている[21]。この穏やかでまろやかな理想郷のような世界に、銀行家の妻の姪であるアメリカ人女性が登場してこの物語は展開していく。

政治的・思想的示唆に富んだ著作を残しているオーウェル（George Orwell, 1903-1950）のお茶関連の発言は、お茶目できっぱりとしていて面白い。「お茶は、この国の文明をささえる生命の綱のひとつである・・・」と述べ、料理本にお茶の項目が欠如していることを嘆いて、お茶の淹れ方の自分のこだわり、「黄金律」を11項目にわたって説明する[22]。また、イギリス人の国民性を論ずるにあたっては、「にんにくだのオリーヴ油だのといったものは大きらいで、お茶とプディングがなければこの世に生きるかいがないのである。」とも述べている[23]。

誰もが知っているであろうアガサ・クリスティ（Dame Agatha Mary Clarissa Christie, Lady Mallowan, née Miller, 1890-1976）からの引用は『そして誰もいなくなった』からで、この他にも登場人物たちは度々お茶を飲んでいるが、ここでは「平常が帰ってきた。お茶。いつもの午後のお茶に恵みあれ。」と集った人々は束の間の平安を喜ぶ。

そして勿論、東洋の諸賢の言葉も並ぶ。栄西（1141-1215）の『喫茶養生記』(1214?)

---

18) Ibid., p. 74.
19) Ibid., pp. 63, 123.
20) 行方昭夫　訳『ある婦人の肖像』(上), 東京：岩波書店, 1996, p. 9.
21) 同上。
22)『オーウェル著作集』III：1943-1945, 東京：平凡社, 1970, pp. 39-41.
23)『オーウェル著作集』III, p. 5.

からは、「茶は養生の仙薬なり」が挙がり、盧仝（790-835）は、「私は不死にはまったく興味がなく、ただ美味しいお茶に関心があるだけである。」と言う。彼はまったく興味がないと言ってはいるが、茶に不死の効能を求める文化を背景にした発言である。彼は、中国の権力者たちが不老不死を求めてその一つの手段として茶に関心をもち、そのために重労働の犠牲を払う庶民の苦しみを茶歌に詠んだ。岡倉覚三（天心）（1863-1913）の『茶の本』（*The Book of Tea*, 1906）からは様々なフレーズを抜き出してくることができるであろうが、以下をよくみかける。「私たちにとって茶は飲むという行為の理想化以上のものになった。生の術の宗教なのである。」[24] この選択は、「天心の『茶の本』は抽象的で精神論に終始している」という見解にも合致する[25]。

その時の幸せ、将来の幸せ

ここまでくると、これだけ多くの引用に目を向けた理由がわかってくると期待する。英語で一般に流れているお茶に関する名セリフのなかで、お茶と健康、長寿、不老不死のことに触れているのは、東洋人ばかりなのだ。英米人たちの注目は、お茶を飲む、そのときの即時的な平穏、幸せ、落ち着き、安心であり、人とコミュニケーションをとる喜びなのだ。茶がかなり頻繁に登場する上記の『麗しきラベンダー』では、「生命の霊薬」（elixir vitae）についての言及がある。ただし茶をそのように言っているのではない。アメリカ人に愛される賢いイギリス人女性が別の身体の弱い女性について意見を述べる場面で、「愛する人に愛されていると知った女の子は魔法にかかった人生を歩み、鼓動が止まるわけないものよ。生命の霊薬が発見されるとしたら、それは男女が互いに恋をし続けるようにするボトルだとわかると思うわ。」と、恋というのは生命の霊薬のように人の生命を維持するものだと言うのである[26]。

グレイのシェイクスピアがお茶を知っていたらどんなに良かったか夢想する部分にも戻り、彼が挙げる茶が連想させるものに耳を傾けよう。

シェイクスピアは雄々しいだけでなく繊細な詩人であるので、蜂がバラやスイ

---

[24]「茶はわれわれにとっては、飲む形式の理想化以上のものとなった。それは生の術の宗教である。」（桶谷秀昭　訳　講談社学術文庫, 東京：講談社, 1994）, p. 34.『茶の本』については、例えば熊倉功夫・関剣平編『岡倉天心「茶の本」の研究』世界茶文化学術研究叢書Ⅳ（京都：宮帯出版社, 2020）参照。

[25] 熊倉氏による「序にかえて」『岡倉天心「茶の本」の研究』, p. 6.

[26] Arthur Wing Sir Pinero, *Sweet Lavender : A Domestic Drama* (London: William Heinemann, 1914), p. 71. これは西洋ではフラメル（Nicolas Flamel, 1330-1418）らの賢者の石（錬金術：水銀などを金にかえる、若返り、あるいは不死をえるための生命の霊薬を手に入れる術）にあたる。

カズラのような芳香をもつものに引きつけられるように茶に自然と引き寄せられたであろうに。「茶」というまさにその語は香しく清く汚れないものを表す。リネン、銀器、陶器、トースト、バター、美しい服をまとった麗しい婦人たちがいる可愛らしい部屋、桃、すもも、林檎の木々と薔薇の香り、そうしたものが、開け放たれてカーテンを半分引いてある窓の向こうにあり、窓からは果樹園か庭を見渡すことができる。5月か6月の朝の風が永遠の若さ思わせ、部屋を香気と優しさと愛と楽観と不死への希望で満たすように。コーヒーは酒場、カフェ、船、ヨット、川辺の宿と悲観を思わせる。茶は楽観だ。コーヒーは強壮薬で、茶は安らぎだ。コーヒーは散文で茶は詩である[27]。

ここに「不死への希望」が言及されている。単に不死ではなく、不死を希求する心である点に注目しよう。ここでは、この楽観と永遠の命を望む心は「5月か6月の朝の風が永遠の若さを思わせ」るごとくであり、これはシェイクスピアのソネット（Sonnet 18）を踏まえ、夏の日と花のつぼみは、その一瞬をとらえれば若さと生命力と最盛期を思わせるものであっても、いずれは衰え、朽ちゆくものであることを既に内含している。どんな生き物も時の流れに逆らうことはできないが、その一瞬の美を詩人はとらえて文字に残すことができる。詩人の作品によってこそ若さと美しさは永遠となるが、それが可能となるのは詩作によってのみと認識する文化をシェイクスピアの読者は知っている。詩の世界以外では、どんなに良きものであってもすべてのものは時の経過とともに最盛期から衰退期をたどりそして死が訪れるのが宿命であることを認識した上で、現在感じることができる楽観と希望を述べるというのがここでの約束事である。茶との連想が向くものが数多くあがったあとで繰り返されるのは、「楽観」と「安らぎ」と「詩」である。グレイにとって茶は不老不死とではなく、そのときの心の平安、楽観や安らぎと結びつく。

シェンケルは魔法の薬をテーマにした論文で、ロマン派から19世紀の作家たちの「生命の霊薬」への際立った関心を指摘している。近代以前の錬金術がロマン主義の時代（18世紀末から19世紀初め）から19世紀に再興し、文学の重要な題材となり、ルイス・キャロルのアリスの世界のような不思議な薬を経て、ウエルズの「トーノ・バンゲイ」のような市場で入手可能な怪しげな薬へ作家たちの想像力が向けられていくことをたどっている[28]。この論文で指摘されていることの中で当論文に直接関係があるのが、まず魔法の薬が魅了した時代の指摘である。第二にヨーロッパとは

---

27) Gray, *The Little Tea Book.*, pp. 37-38.

28) Elmar Schenkel, “The Power of the Potion: From Gothic Horror to Health Drink, or, How the Elixir Became a Commodity,” in *Drink in the Eighteenth and Nineteenth Centuries*, ed. Susanne Schmid and Barbara Schmidt-Haberkamp (London: Routledge, 2015), pp. 167-79.

異なる文明としての東洋的なものへの言及である。彼の指摘によれば、ロマン主義の時代に生命の霊薬が再び人々を引き付けるのである。それというのも、17世紀の科学革命が顕著になる時期、そして18世紀にそれは影が薄くなったからである[29)]。18世紀の出版物について‘elixir’〈卑金属を金に変えるという錬金薬、または不老長寿の霊薬〉の出現を追うと、17世紀末の30年間にはほとんどなく、1700年になると増え始めるが1740年までは年間20から50くらいを繰り返し、その後の30年くらいで50から80の間を動き、1770年からの30年間では100前後を行き来する数の出版物が発行された。この間に書物市場は目覚ましい成長を遂げているので、出版物の中での関心の割合としては18世紀を通じて低迷する。18世紀末からのロマン派から19世紀には生命の霊薬をめぐって作家たちは豊かな想像力の世界を広げていったというのがシェンケルの主張である。その関心の代表例として彼が例として挙げているのは、メアリー・シェリー（Mary Shelley, 1797-1851）とブルワー・リットン（Edward Bulwer-Lytton, 1801-72）の作品である[30)]。1842年のブルワー・リットンの不老長寿と恋の話（*Zanoni*）では、主人公はカルデア人でチグリス・ユーフラテスの古代文明の時代から生きていてフランス革命の1789年を迎える。ヨーロッパから見た東方の古代のカルデア人は魔法に長けて神秘の薬の調合法も知っていたのである[31)]。同著者の20年後の作品（*A Strange Story*, 1862）でも不思議な力は東方からもたらされる。アレッポで出会った人物は、「類稀なる知恵を備えていると評判で」「東洋のたくましい創造力」が描いたところでは魔法使いであり、彼は「超自然の年齢」にあって「中世において科学的知見を追求し近代科学を導いたアラビアの賢人」に似て「神秘主義者でありながら真摯な学者であった。」[32)] この作者にとって生命の霊薬は、遠い昔のイギリスとは異なる文化に発するものであり、中近東の知恵である。

王立協会の設立（1660年）に代表される科学的知識の追求と合理的思考重視の啓蒙の時代にイギリスに茶がもたらされた。ちょうど茶がイギリスに導入されて、普及していった時期は、魔法の薬や生命の霊薬がその魅力を失い、不思議な魔法から覚めて科学的思考に傾倒していた時期だった。茶が未来を変える不可思議な魔法の霊薬としての位置づけを与えられず、別の価値観と共に人々に受け容れられていったことは、茶の導入と普及の時期がまさにこの魔法の霊薬低迷時代であったことと大いに関係があるだろう。

茶がイギリスに導入された頃には、確かに病の症状への対処の薬的な効能が強調

---

29) Ibid. p. 169.
30) Ibid., pp. 170-71.
31) Ibid. p. 171.
32) Edward Bulwer Lytton, *A Strange Story* (London: Sampson Low, Son & Co, 1862), p. 146.

された。1660年の有名なガーウエイ（Thomas Garway）のコーヒーハウスの広告では、「身体活発、欲望をたきつける、頭痛に良い、（不機嫌、かんしゃく、結石、腎臓、呼吸、視界、倦怠感など）つかえているものを除去する、胃袋を強化、悪い夢を取り去り、頭をすっきりさせて記憶を強化、眠気を取り去る、熱を取り去る、消耗病を防ぎ、腸を強化する、風邪や浮腫や壊血病を防ぐ、血液を浄化し、感染症を追いやる、痛みを除去」といった「特筆すべき個別の効能」がある有難いものとして茶が後押しされた[33]。概して健康に良いとか、長寿をもたらすというのではなく、個別の症状に対処し苦痛を和らげる効果に関心を払っている。また即時的な対症効果が列挙されている。

西欧の健康長寿に関する概念の歴史を研究したベルグドルトによると、15世紀くらいから、健康だけでなく、長い人生を人は夢見るようになり、個人が自分の健康について関心をもち、自分で身体を管理することに気をつけるのが目立つようになるのは、16世紀のことだった。この文脈で、キリスト教社会において死を永遠の生を得ること、俗世を離れて神のもとに行くこととのみ直結させて考える風潮に変化がみられ、この世において長い生を得ることに積極的な価値を見出すようになったことが指摘される[34]。

そうではあっても、茶が普及していった18世紀に茶が結びついていったのは、茶を飲む人それぞれの長期的な視点に立って期待する健康・長寿というよりも、目の前にいる人との会話を通じての交流や家族の団欒といった人と人とのつながりであり、それぞれの個人が得ていたのは、その人の今、その時の満足と心の平安だった[35]。茶の普及に反対した人々は、ハンウェイのように「茶は通商の有害物品であるばかりでなく、勤勉と労働において非常に悪質な傾向のものであり、健康には非常に有害であると私は考えています。」とか、「茶を飲むことは中庸ではありますが、悪に傾くところです。なぜならそれは健康を害し、人生を短くするからです。」と、茶が貿易上の問題だけでなく、健康に害を及ぼす危惧があると指摘した[36]。19世紀には、禁酒運動が特にアメリカで顕著になり、人を酩酊に陥れるアルコールにかわる安全な飲料としての茶の有効性が説かれるが、18世紀のイギリスで特に健康と道徳に悪いという評価を受けたジンの対極にあったのは、遠い東洋の世界からやって

---

33) William H. Ukers, *All About Tea* (New York: Tea and Coffee Trade Journal Co., 1935), I, p. 39.

34) Klaus Bergdolt, *Wellbeing : A Cultural History of Healthy Living* (Cambridge ; Malden, MA: Polity, 2008), p. 178.

35) Kate Retford, *The Conversation Piece : Making Modern Art in Eighteenth-Century Britain* (New Haven: Published for the Paul Mellon Centre for studies in British Art by Yale University Press, 2017), pp. 15, 50, 66-73, 88-89, 158-160, 175, 220, 251-285, 317-318.

36) Jonas Hanway, *A Journal of Eight Days Journey from Portsmouth to Kingston Upon Thames ... In a Series of Sixty-Four Letters: Addressed to Two Ladies of the Partie. To Which Is Added, an Essay on Tea ... With Several Political Reflections; and Thoughts on Public Love ...* (London: H. Woodfall, 1756), pp. 204, 274.

きた茶ではなく、根付いて年月が経っていて自家製、自国製のイメージをもったビールだった。歴史的背景やその時の文化的風潮により、そして政策や経済事情、あるいは販売側の戦略により商品や習慣が人の心をとらえることができるかどうかは変わってくる。かなりの長寿を達成している現在の日本で、茶は仙薬と言うことが茶文化促進にどれだけの効果をもつだろう[37]。茶に関する価値観をどのように考え、どんな戦略をもってどのような文化を形成していくのか、新たに考えていく必要があるだろう。

Select Bibliography:

Austen, Jane. *Mansfield Park*. with an introduction by Kathryn Sutherland ed. London: Penguin, 2014.

Bergdolt, Klaus. *Wellbeing : A Cultural History of Healthy Living*. [in Translated from the German.

English translation of: Leib und Seele.] Cambridge ; Malden, MA: Polity, 2008.

Blackburn, Robin. *The American Crucible : Slavery, Emancipation and Human Rights*. London: Verso, 2013.

Coleman, Deirdre. "Imagining Sameness and Difference: Domestic and Colonial Sisters in *Mansfield Park*." In *A Companion to Jane Austen*, edited by Claudia L. Johnson and Clara Tuite, 292-303. Chichester: Wiley-Blackwell, 2012.

Ferguson, Moira. "Mansfield Park: Slavery, Colonialism, and Gender." *Oxford Literary Review* 13 (1991): 118-39.

Fielding, Henry. *Love in Several Masques. A Comedy, Etc.* [1728]. https://www.amazon.co.jp/Love-Several-Masques-universal-English-ebook/dp/B07MF218V3/ref=tmm_kin_swatch_0?_encoding=UTF8&qid=&sr=.

Gibbon, Frank. "The Antiguan Connection: Some New Light on "Mansfield Park"." *The Cambridge Quarterly* 11, no. 2 (1982): 298-305.

Gray, Arthur. *The Little Tea Book*. New York: The Baker & Taylor company, 1903.

Hanway, Jonas. *A Journal of Eight Days Journey from Portsmouth to Kingston Upon*

---

37) 厚生労働省2022年7月発表の2021年の日本人の男性の平均寿命は81.47年、女性の平均寿命は87.57年であった（https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/life/life21/dl/life18-15.pdf）。COVID-19の影響などにより前年を下回ったが、世界各国と比較して第一位としている統計、香港やスイスに次ぐとしている統計がある。https://www.who.int/data/gho/data/indicators/indicator-details/GHO/life-expectancy-at-birth-(years); https://memorva.jp/ranking/unfpa/who_whs_life_expectancy.php.

Thames … In a Series of Sixty-Four Letters: Addressed to Two Ladies of the Partie. To Which Is Added, an Essay on Tea … With Several Political Reflections; and Thoughts on Public Love … . London: H. Woodfall, 1756.

———. *A Journal of Eight Days Journey from Portsmouth to Kingston Upon Thames … In a Series of Sixty-Four Letters: Addressed to Two Ladies of the Partie. To Which Is Added, an Essay on Tea: Considered as Penicious to Health: Obstructing Industry and Impoverishing the Nation…With Several Political Reflections on Thoughts on Public Love in Twenty-Five Letters to the Same Ladies*. London: printed by H. Woodfall, 1756.

Lytton, Edward Bulwer. *A Strange Story*. London: Sampson Low, Son & Co, 1862.

Mullen, Stephen, and Research University of London. Institute of Historical. *The Glasgow Sugar Aristocracy : Scotland and Caribbean Slavery, 1775-1838*. [in English] New Historical Perspectives. London: Institute of Historical Research, 2022.

Pardoe, Rosemary. "Arthur Gray." http://www.users.globalnet.co.uk/~pardos/ArchiveGray.html.

Pinero, Arthur Wing *Sweet Lavender : A Domestic Drama*. London: William Heinemann, 1914.

Pinero, Arthur Wing Sir. *Sweet Lavender : A Domestic Drama*. London: William Heinemann, 1914.

Retford, Kate. *The Conversation Piece : Making Modern Art in Eighteenth-Century Britain*. New Haven: Published for the Paul Mellon Centre for studies in British Art by Yale University Press, 2017.

Said, Edward W. *Culture and Imperialism*. London: Vintage Digital, 2014.

Schenkel, Elmar. "The Power of the Potion: From Gothic Horror to Health Drink, or, How the Elixir Became a Commodity." In *Drink in the Eighteenth and Nineteenth Centuries*, edited by Susanne Schmid and Barbara Schmidt-Haberkamp, 167-79. London: Routledge, 2015.

Ukers, William H. *All About Tea*. New York: Tea and Coffee Trade Journal Co., 1935.

Williams, Eric Eustace. *Capitalism and Slavery*. Chapel Hill, N.C.: University of North Carolina Press, 1944.

Zhang, Lawrence. "Becoming Healthy: Changing Perception of Tea's Effects on the Body." In *Moral Foods : The Construction of Nutrition and Health in Modern Asia*, edited by Angela Ki Che Leung and Melissa L. Caldwell, 201-20. Honolulu: University of Hawaii Press.

ジョージ・オーウェル『オーウェル著作集』III：1943-1945, 東京：平凡社, 1970.

岡倉天心『茶の本』桶谷秀昭　訳　講談社学術文庫, 東京：講談社, 1994.
角田隆巳『お茶で手に入れる最高の健康』, 東京：ポプラ社, 2022.
熊倉功夫・関剣平編『岡倉天心「茶の本」の研究』世界茶文化学術研究叢書IV, 京都：宮帯出版社, 2020.
ヘンリー・ジェイムズ　行方昭夫　訳『ある婦人の肖像』(上), 東京：岩波書店, 1996.
『新版茶の機能　ヒト試験から分かった新たな役割』日本茶業中央会　編集：衛藤英男、冨田勲、榛村純一、伊勢村護、原征彦、横越英彦、山本（前田）万里, 東京：農文協, 2013.
https://www.theteaclub.com/blog/these-tea-quotes-are-just-the-best/
https://simplelooseleaf.com/blog/life-with-tea/tea-quotes/
https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/life/life21/dl/life18-15.pdf
https://www.who.int/data/gho/data/indicators/indicator-details/GHO/life-expectancy-at-birth-(years); https://memorva.jp/ranking/unfpa/who_whs_life_expectancy.php.